

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12961

研究課題名（和文）ローベルト・ヴァルザーにおける「現実」と「虚構」の位置価

研究課題名（英文）A Study of Realism and Fictionality in Robert Walser

研究代表者

葛西 敬之（Kasai, Takayuki）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：80820951

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究はローベルト・ヴァルザーの諸作品において「現実」と「虚構」がそれぞれどのような位置価を持っているかを明らかにするものである。ヴァルザーにおいてこの両者の要素が、同時代の言説に接しつつそこからイロニーッシュに距離をとることでオリジナルな筆致へと至る背景やプロセスについて明らかにした。例えばそれは、『1926年の「日記」・断片』において、新即物主義的に現実を描こうとする試みが、次第に現実か虚構かの問題からそれらを書く行為自体の「現実」への変質の過程においても確認でき、ヴァルザーの特徴の一つとみなすことができるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヴァルザーの諸作品におけるこの「現実」と「虚構」の二つの要素は、これまでの先行研究において、その語り手と作家ヴァルザーとの関係をめぐって論じられてきた。本研究は既存の研究を踏まえ、これまでの研究で十分に扱われてこなかった第一次大戦期におけるスイスおよびドイツの文芸誌をとりまく状況や、その後の1920年代のノイエザッハリッヒカイトの流行といった背景のもとに、ヴァルザーの作品におけるこの二つの要素を分析した。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the relationship between “reality” and “fictionality” in Robert Walser's works. The study reveals the background and process by which Walser, by coming into contact with the discourse of his time and distancing himself from it in an ironic way, has come to write in an original way. For example, in “Diary Fragments from 1926,” the Neue Sachlichkeit attempt to depict reality is gradually transformed from a question of reality or fiction into the “reality” of the act of writing itself, which can be considered one of Walser's characteristics.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：文学 ローベルト・ヴァルザー リアリズム フィクション

1. 研究開始当初の背景

19 世紀末から 1930 年代にかけて活動していた作家ローベルト・ヴァルザーは、その間に遺稿を含む長編小説四作のほか雑誌・新聞を中心に 1000 を超える散文小品を発表したが、生前はヴァルター・ベンヤミン、フランツ・カフカ、ローベルト・ムージルといった、一部の批評家や作家に評価されるにとどまっていた。死後しばらく経ってのち、その諸作品が再評価され現在までドイツ語圏を中心にフランス語圏、英語圏でも多くの研究がなされている。一見すると素朴・牧歌的なテキストの内に、自己言及性・自己参照性といった、すぐれて「モデルネ」的といえる要素が含まれていたことが、この再評価に繋がったのである。

ヴァルザーの作品を再評価する諸先行研究には、ジャック・デリダやジャック・ラカンといったフランス現代思想を援用したものや、近年では絵画を含む視覚や聴覚とのいわば共感覚性を論じるもの（例えば Beat Bichsel: *Augen-Blicke des Schreibens. Zur Poetik des Visuellen in der Schreibszene Robert Walsers* (2020) や Anna Fattori (Hg.): *Bildersprache Klangfiguren. Spielformen der Intermedialität bei Robert Walser*. (2008)）など様々あるが、その中でもヴァルザーの諸作品に登場する「私」は継続して論じられてきた。一見するとその「私」は伝記的な作家ヴァルザーと一致するようにも見えるのだが、諸作品のなかに登場する様々な「私」はひとつの安定した主体たる「私」に統合されず、セルジュ・ドゥブロフスキーが提唱する（それも約半世紀ほど先取りして）オートフィクションを作り出す存在として措定される。

2. 研究の目的

本研究は上述の特異な「私」の生成過程を、『1926 年の「日記」・断片』を中心にヴァルザーの諸作品を精読し、分析するものである。この『1926 年の「日記」・断片』というテキストは、稿の中に含まれていたものの中では長編小説『盗賊』に次ぐ分量を有し、その内容もヴァルザー研究の第一人者のひとりである Reto Sorg 氏をして「ヴァルザーの詩学の鍵となるテキスト」と言わしめすものであるが、他の長編小説と比して、これまで十分に研究はなされていない。具体的にいえば、このテキストの語り手である「私」が、「日記」と銘打たれながらも、それが虚構の「私」であり、作家ヴァルザーとは一致しないことは既に指摘されている。しかし、この語り手が、なぜ「日記」という形式を選び取り、そしてその中で執拗に「現実を体験した通り」に書くことと自己言及的に語るのかについては、十分に論究されてこなかった。また、そもそもなぜこの語り手が、「現実を体験した通り」に書かなくてはならないという要請を感じるのかについても、テキスト内で語り手自身が挙げる「虚構を含んだ作品の出版をかつて拒まれたため」という理由以上の説明はこれまでの研究においてなされていない。この点を解き明かすために、本研究は『1926 年の「日記」・断片』とその同時期に書かれたヴァルザーのテキストの検討に加えて、上述の二点の疑問と関連している同時代の表現主義や新即物主義をめぐる文学的ディスコースの分析を行い、上記の疑問点が生じた背景と、この『1926 年の「日記」・断片』内の「現実」と「虚構」の位置価値を明らかにし、ヴァルザーの詩学理解に寄与することを目的としている。

3. 研究の方法

まず 1920 年代の文学的言説について考察するために、表現主義をめぐる言説について資料を収集し、分析する。これに際しては、1920 年代に限らず、1910 年代のものも当然分析の対象となる。しかしながらドイツ語圏の表現主義運動は極めて多岐にわたることから、まずは『ディー・ヴァイセン・ブレッター』などのヴァルザーが寄稿したことのある媒体が調査対象として優先される。これは、同誌に掲載されたものであれば、ヴァルザー自身がそれを読んでいる可能性が高くなるためである。それと並行して、クルト・ヒラーやヘルマン・バルといった同時代の言説形成に大きく寄与した人物らの文章を改めて精読する。これらの手続きを経たうえで、近年の表現主義に関する研究、例えばシルヴィオ・ヴィエッタやトーマス・アンツ等の理論的研究を批判・検討し、表現主義（およびその運動）の性質や拡がりを整理する。

次に新即物主義に関連する文学的言説の分析が遂行される。ただし、狭義の新即物主義に限らず、「現実」や「事実」の描写を重視するものも分析の対象に含まれる。また分析の対象にはヨーゼフ・ロート、リオン・フォイヒトヴァンガー、ハンス・ファラダ、エーリヒ・ケストナーらの、新即物主義と通例みなされる作家が入るが、中心となるのは彼らの作品よりも、彼らが自らの作品をどのように「事実」の描写をするものとして自認していたかである。作品分析自体は、彼らの主張が実践においてどのように結実したか（あるいは逸脱したか）を検証するという点に絞り検討する。この作業と並行して、新即物主義研究の古典的位置を占めているといつてよいヘルムート・レーテンの *Neue Sachlichkeit 1924-1932: Studien zur Literatur des "Weissen Sozialismus"* (1970) 再読や、ザビーネ・ベッカー、モーリッツ・パスラーらの近年の研究の精査

を行う。それらの調査・検討を踏まえて、ヴァルザーの『1926年の「日記」・断片』および「現実」と「虚構」の問題系を共有するヴァルザーのその他のテキストを改めて分析・考察する。

4. 研究成果

まずは主に表現主義に関する理論的著作のほかに、『ディー・ヴァイセン・ブレッター』などの表現主義的雑誌を渉猟した上で、ローベルト・ヴァルザーのテキストとの関わりを分析した。その成果は国内学会で発表した。そこでは、少数ながらヴァルザーを表現主義と結びつけるこれまでの諸研究を概観したのち、改めてヴァルザーのテキストにおける表現主義的な要素を検討し、そのうえでヴァルザーのテキストが表現主義とは異なる道へと進んでいることを、とくに作品集『詩人の生』所収の短編「労働者」の雑誌掲載時からの書き換えと同時代の表現主義および当時もっとも切迫した「現実」であった戦争に関連する言説との関連において分析した。この点についてはさらに別のドイツ語による口頭発表「Grenze schreiben. Robert Walsers feuilletonistisches Schreiben in der Kriegszeit (境界を書く—ローベルト・ヴァルザーの戦時期におけるフェュトン)」を通じても検討を行い、論文「ローベルト・ヴァルザーの表現主義との距離—その捉え難さの一要因について」として発表した。

また上述の作業とは別に「ドッペルゲンガーの恋—ローベルト・ヴァルザー『盗賊』と長編小説を書くということ」[信州大学人文科学論集、9(2)、139-149頁、2022年03月]という題のもとで発表した論文において、ヴァルザーのテキストにおける語り手の「私」がとる位置の特異さに、とりわけその二重性について論じた。

続いて1920年代ドイツ語圏における新即物主義やルポルタージュ文学を中心とする文学における「現実」と「虚構」に関する言説を調査・整理し、それを踏まえてローベルト・ヴァルザーの同時代の諸作品、とりわけ『1926年の「日記」・断片』の有する虚構と現実を脱構築する構造について国内学会(タイトル「ローベルト・ヴァルザーにおけるリアリズムの問題について」日本独文学会北陸支部研究発表会)にて報告した。上述の戦争や表現主義との関連において、ヴァルザーがいかに戦争をめぐる様々な言説の中で表現主義をはじめとする特定の一言説から「私」をどのように差異化させているのかそのプロセスを論及したが、そのようにして同時代の言説に接しつつそこからイロニーに距離をとることでオリジナルな筆致を獲得していることは、この『1926年の「日記」・断片』においても、新即物主義的に現実を描こうとする試みが、次第に現実か虚構かの問題からそれらを書く行為自体の「現実」への変質の過程として確認でき、これはヴァルザーの特質の一つと言えるだろう。

さらに、本研究課題を通底する問題に対する上記とは異なるアプローチとして、ヴァルザーと同様に言語による伝達可能性という契機がその文体に大きく関わっている作家であるトーマス・ベルンハルトとの比較を行い、二人の作家において「現実」がどこまで、どのように書かれているか、という点を扱う論考を共著のうち一章「ローベルト・ヴァルザー『散歩』とトーマス・ベルンハルト『行く』—二つの歩行する散文の分岐点」[前田佳一編『モルプス・アウストリアクス』法政大学出版局、2023年所収]として執筆した(なおこの論考は2021年度に行った口頭発表「R. ヴァルザー『散歩』とTh. ベルンハルト『行く』—二つの歩行する散文の接点と分岐点」[戦後オーストリア文学研究会第4回コロキウム(オンライン開催) 2022年03月26日]をもとにしている)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 葛西敬之	4. 巻 9
2. 論文標題 ドッベルゲンガーの恋—ローベルト・ヴァルザー『盗賊』と長編小説を書くということ—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 139-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 葛西敬之	4. 巻 11
2. 論文標題 ローベルト・ヴァルザーの表現主義との距離—その捉え難さの一要因について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 葛西敬之
2. 発表標題 ローベルト・ヴァルザーにおけるリアリズムの問題について
3. 学会等名 日本独文学会北陸支部2022年度研究発表会（於福井県教育センター）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 葛西敬之
2. 発表標題 ローベルト・ヴァルザーの表現主義との距離
3. 学会等名 スイス文学会研究発表会
4. 発表年 2021年

1．発表者名 葛西敬之
2．発表標題 Grenze schreiben. Robert Walsers feuilletonistisches Schreiben in der Kriegszeit.
3．学会等名 Kolloquium I : An der Grenze schreiben: Feuilleton und Moderne.
4．発表年 2023年

1．発表者名 葛西敬之
2．発表標題 R. ヴァルザー『散歩』とTh. ベルンハルト『行く』 - 二つの歩行する散文の接点と分岐点
3．学会等名 戦後オーストリア文学研究会第4回コロキウム（オンライン開催） 2022年3月26日
4．発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1．著者名 前田佳一	4．発行年 2023年
2．出版社 法政大学出版局	5．総ページ数 428
3．書名 モルプス・アウストリアクス [担当箇所：ローベルト・ヴァルザー『散歩』とトーマス・ベルンハルト『行く』ー二つの歩行する散文の分岐点、381-403]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------